

---

# そこは真剣な世界だった

貧弱戦士

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

そこは真剣な世界だった

### 【Nコード】

N9918Y

### 【作者名】

貧弱戦士

### 【あらすじ】

とりあえずお気楽ライフを送っていた主人公「神川 獣代」。いつものと同じ、悪友とツルんでいた毎日だった、ある日彼に人生の幕を閉じる出来事があった。彼は死に、彼のもう一つの物語は始まった

## ブローグ

「ああ、暇だ」

開口一番はコレだが、俺は『神川 獣代』だ  
まあよろしく？

今年で高校二年生だ。まだ学生だぞ？

「誰か俺に挑む、若人達はいねえーかなー」

学校の机でうつ伏せになり、現在の願いを言う

だって！ 勉強とかつまらないわ！！ もっとハードをしたいの  
よ！！

「何言ってるんだい。『餓王』や『野生の原点』って言われている君が、  
そんな無理な願いを言っちゃ駄目でしょ」

「うつせえ。そのあだ名はお前しか言ってるねえだろ？ だが、何故  
か女子からは『猿人』と呼ばれるが……そうか！！ 嫌よ嫌よも好  
きのうちか！！??？」

「たんに嫌われているだけ（笑）」

「ウツセエエエエエエ！！！！」

『ドガーーーーー！！！！』

目の前に机全体を引つ繰り返した

コノヤロー、昔からムカつく野郎だ……！！！！ 殺す！！

「僕は避けるのが専門だから、君の行動なんて昔から読めているしね」

「ア”ン!? 女川 悟ウー……!!! 咬むぞゴリアア!!!」

「野獣…… (ボソツ)」

「聞こえたぞ、サアアアトオオルウウウ!!!」

昔からの俺の幼馴染、女川 悟

眼鏡を掛けて、髪はショートだが列記とした女性だ。だが、何故か男装をしている

て、内心から説明しているんじゃないかなかった!!!??

「食らえエエエ!!! 『ワイルド野生パンチ』!!!」

黒板の前で追いつき、そこで隙を突き右腕全体を放った  
だが悟は彼に避け、舌を出してまでも逃走し始めた  
糞!!!

「待てやゴリアアアアア!!!」おい、神川!!! また貴様か!!!  
ぎべっ!?!」

追いかけてようとしたが、国語の担任が俺を怒声で止めた  
毎回毎回怒っている、 な野郎だ…… めんどくせえ

「神川!!! これは何だ」

「何って、おいおいていーちゃー? そこは黒板のはず…… あれ!

？ 何か隣の教室と開通しているんだけど！？ どういう事だ！！」

「お前のせいだ！！ また破壊しおって……！！！！」

さつき放った『フィルト野生パンチ』が黒板と隣のクラスとの壁を破壊していた

まさか悟、こんな事に気づいて……！！！！ この悪魔がアアアア！！！！

「罰として、今日の放課後の教室掃除はお前一人だ！！！！ わかつたな！！！！」

「そ、そんなアアアアアアアア！！！！ お代官様、いや仏様！！！！ それだけは……！ それだけは！！！！」

「罰は罰！！！！」

この糞ていーちゃー？ が！！！！ 今度お前の頭の草原、雑草の如くムシってやる！！！！

「あははははは！… 本当に君は面白いよ！… ぷぷ」

「テメエ、咬むぞ！！ ボリツとゴリツとニヨロツとガブツとするぞ！！！！」

「君の事、色々漏らすよ」「すみません」「よろしい」

もう外は夕日が無くなり始め、月がどんどんと上っていく時間  
悟と一緒に下校し、今は横断歩道の信号が赤なので止まっている

「色々とか、お前セコイ……」

「ははははは！！… 誉め言葉さ。さあてと……！！！？？ 獣代！！  
アレ！！！！」

「あん……て、うおおおおおお！！！！」

悟は指を指し、それは乳母車が勝手に動き赤ちゃんが渡っている  
お母さんらしき人物は他の人と話して気づかず  
俺はすぐさま動いた

「あっ……ぶねエエエエエエエエ！！！！！！」

『キキーーーー！！！！』

ロケットの如く早く、すぐさま乳母車から赤ちゃんを取り出し車  
から避けた

周りの人はホツとした

「!?! 私の子ちゃん!!!!!!」

「ほら、お母ちゃんだぞ。見えるか?」

「あーうー」

お母さんも気づき、手を振っている

これで安全……

だと思った

この場の全員が

運命とはとても皮肉で、神様とはとても信用してはならないと……

『プープー！！！！』

「なっ！？ た、タンプカー！！！？ しかも四台だとオオオオオオオオ！！！？」

さっきの車があなったから、何故かタンプカーが……しかも四台ともパニックになり、走り続けている

これじゃあ、サンドイッチだ

これは頭をフル回転した。このままじゃ俺とこの赤ちゃんも死ぬじゃう

けど、赤ちゃんだけなら……

「悟ウウウウウウ！！！！ 受け取れエエエエエエ！！！！」

『ビュン！！！！』

「え……お、おっと！！」

赤ちゃんを投げ、悟は慌てて受け取った

さあ、生きるよ？ 赤ちゃん

俺は四台のタンプカーを見つめた。運転手達はすでに降りている……けど、それでも動いている

いや、止まろうとしているが遅い

て、何で俺は冷静なんだよ……俺らいくねえな！！！！

「一台でも多く止めてやる！！！！ これ以上被害は出させないぜ！



「！！ 食らえエエエエエエ！！！！！！」

「獣代……………！！！！？？」

右腕を最大限まで引き、タンプカーが来るのを待った  
けど……………時間は何秒よりも早かった

「『ワイルド野生パンチ』……………！！！！！！」

『ド…………………………ン……………！！！！！！』

これで、俺の物語終わり！！

「ホンマ、すみません……………！！！！」

「はい？」

だが、それには外伝というのがあった

「01」 俺の本当の世界にゴ―!!

さてと、今さっき死んだ俺は何しているんだろ？

いや起き上がったら変な人が土下座しているし、俺は一体何やつ  
たんだ

もしや、カツアゲ！？ いやいや、記憶はちゃんと存在してんだ。  
ありえねえ

じゃあ……ん？

よく見れば、その人の頭には金色に光わっかがあつた  
そうか……やっぱ俺は死んだんだな

「あゝ、何で謝っているんだ？ 俺は死んだからか？」

「いえ、違うんや!! これは事故というか……ホンマ、すんませ  
ん!!」

「……はい？」

顔を上げれば、男性で俺よりもイケメンな人だった

関西弁か……ギャップはいいなって、違う違う!! 何で謝って  
んだ？

「事を話してくれ」

「は、はい……そう、アレはついさっき」

語り side

そう、あれはほんの一時間前のことなんや

おっと、まずは自己紹介やな。ワイはゼウス隊第二隊長の、まぶた瞼つ  
つーもんや

一応ワイの上司、まあゼウスはんの部下なんやが……まあ、それは  
おいおい

ワイは現当……神川はんが居た世界の事や。そこでな、何時もと  
同じように現当の警備しとったんよ？

んでな？ ワイ等はいわば死神なんやけど、警備と兼ねて死人の  
魂もこの天界という所に連れていくんや？ ここまではわかるやろ？

「まあ、だいたいな」

そんでなあ、まあ何ともあるうことかに、さっきお前さんが助け  
た赤ん坊……実は今日が命日やったんや

そんで、ずーっと近くで待機してはったら何とお前さんが助けた

んや

「ふんふん」

……事の重大がわからんやろうが、ワイ等にとっては重大かつ一大事なんやさかい

今日が命日なはずなのに、何で一人の人間の力で生きているや！

？ と……お前さんのせいや

「待てよ。それは運命が……こう、変わったとでも！？」

そうや

赤ん坊は助かり、お前さんが死んだ。ワイ等の読みとは全然違うや。それでちよつとお前さん……神川はんの事について色々調べてもらうたさかい

「個人情報だぞ！！」

いや、今はそれ言うたらあかんで？

んでわかった事が一つあるんや……お前さん、自分の『力』が不思議と思つた事あるんやないか？

「たしかに……異常とは思つが」

そう、それや……

お前さん……『生きる世界』間違いたんや

「……はい！？ 俺はあそこで普通に生きてたんだぞ！？」

たしかに、けどお前さんは間違いたんや。それも……ゼウス

はんのせいだな

「そのゼウス殺す!!! ゼウスもどきがアアアアアアアアアア!!!」

まあゼウスはんは本物や

いいから話聞きたい。ワイの上司はゼウスはんなんや!!! だから、この失敗は他に知らされては困るんや

だから……本当は天界で住むはずなんやけど、お前さんは特別に『転生』をやらせてもらう

「うおおおおおお!!! 何処だゼウスウウウウウウウウウウ!!!」

話聞け!!!

いいか!!! 今からその儀式を無理やりにさせてもらうで!!!

! お前さんの『本当の世界』や!!!

獣代 side

転生だが知らないが、んなのに構ってられるか!!!

「出てこいやアアアアアア!!! ゼウス!!! ぶつ殺してやるウウウウウウ!!!」

「……ほんな野獣やな。んじゃまあ、アッチでも頑張りや。『神川

獣代。ゼウスの承諾により、転生を許可する!!!」

「おわっ!? 何だ、足元が光ったぞ!?」

足元が光だし、何やら魔方陣ぽいのが浮き出た  
魔方陣は回転だし、辺りは突風や竜巻が起こりだした。俺はそ  
の中心なので、大丈夫だが……

「神川はん!! 苗字や名前はそのままや!! 最初はブローク  
ンになるやろつが、まあそこは耐えるんやな!! んじゃま、また  
死んだら会おうさかいに!!」

「うおオオオオオオオオ!!!????」

そして風に巻き込まれ、意識が無くなった

もう何が起きているんだよ……はっ!? これも悟の策略か!!  
???





く〇く 宿敵登場!?

さてお前ら、久しぶりだな

いや、こつちの世界だともう数年くらい経っているから、久しぶりなんですよ……

まあ、最初はブローケン以上だったが、もう慣れたな

……自分が悲しくなるな。慣れて、怖いな

んでだ、今は俺は幼稚園の年長組みだ。まあ、この世界の人はとにかく凄いつつーのがわかった

この街の偉い人は、チームを素手で撃てるつつーし、俺もワクワクだねエ

まあそんなために、一応俺の名を広げるために……

「あにき!! ぱんかってきまちた!!」

「あにき!! かたをもみましゅ!!」

「おうおう、よきにはからえだぜ!!」

絶賛年長組みを絞めて、こうなりました

もう世紀 覇者ですよ、俺は。周り舎弟だらけ、もう幼稚園ライフ遠のいたよチクシヨ

いや、入学直後の喧嘩売られたからさーちょっと、アレをしちゃったわけですよ

それでそれ以来、俺は年々とこの幼稚園の番長となっていたんだぜ!

うん……俺が名乗ってじゃねえ、色んな奴がそう言っているだけだから、男友達はできても女友達は出来ねえんだよ  
はあ、これから甘酸っぱいくない、まさに梅干だな。レモンじゃなくて……梅干の酸っぱいの如く人生送るんだろうな

「おいおまえ!!」

「はあ？ なんだよって……」

超不機嫌で答え振り向いたら……そこには、可愛い女の子だ  
仁王立ちしていた

まさか、これは運命……!!  
なわけえなか……馬鹿らしい

「何だよ、急に呼び出すなんて」

「おまえ、えんのたしか……そう！ かみかわだな!!」

必死に思い出そうと頭を抱えて、人差し指で俺を指す  
ひらがなのが、良い……ていかんいかん!! なんか変な方向に進む所だった

「そうだが……お前の名は」

「わたしはかわかみ ももよ!! おまえにけつとうをいどむ!!」

「……馬とかで良く使う言葉」

「それは血統!!」

「やる事する事」

「それは実行！　って、いいからけつとうしろー！ー！ー！！！！」

漢字知ってたんだね。決闘って、幼稚園児がするもんじゃねーぞ  
仕方ねえ、ここは力の差というのを思い知らしてやるか  
右拳に息を吹きかけ、一気に引き……

「『<sup>ワイルド</sup>野生パンチ』！！」

『ドン！！』

「！？！？」

地面に向けて放ち、まるで爆弾が起こった跡が残っていた  
たく、早く強い奴に会いたいぜ……  
女の子の顔は下に

「さあ、これが俺の力だ。これでわか「ふふ、ふはははははははは  
！ー！ー！ー！！」え」

急に高笑いをした

ど、どうした！？　ビビって壊れたのか！？　だが、それは違った  
そう、完全に笑っていた。苦笑いじゃなく、何かに笑って

「おもしろいぞ！！　わたしもだんだんてんしょんがあがってきた  
ぞー！！　さあ、けつとうだー！！」

さらに熱くさせちゃったー！ー！ー！！！！？？

女の子は構え、それを一切止めない。そしてまたもニヤリを笑う  
やるしかねえみたいだな……。俺も自分流で構えた

そしてまるで空白の世界のように、あたりは静かとなった  
最初に動いたのは……

「やっぱやめた」

「へ!？」

「おまえはまだまだおたのしみだ!! ここではやりたくないし、  
いつかやろう!! じゃあ」

構えを解き、疾風の如く俺から去って行った

は、はははは……おいおいおい、そりゃあねえだろ? そり  
ゃあねえだろ?

ここまで盛り上がってねえ

俺の所だけ木枯らしが吹いた

『ブツチン!!』

そして何かがキレた……人間の理性が

「ざけんなゴラァァァァァァ!! 此処は戦う所だろオオオオ  
オオオオ!!!」

よ  
かわかみ ももよか……いつか出会ったとき、決着を着けてやる

く〇く 風の子、努力の子、知の子

さてと、あれからもまた時が経ちました……  
もちの如く、あのかわかみという少女とはあれから一切も会って  
いない

舎弟から聞いてみたら、川神 百代という川神院の孫らしい

『あ？ 川神院って何だ？』

と聞いたら、周りの人はたいそう驚いていた  
周りが揃ってこう言った……

『『『『日本の兵器だよ！?!?!?』』』』

らしい……日本の兵器か、そりゃあ最強と言っても過言じゃなさ  
そうだな

うーん、早く戦いたいのが何故かあの少女と俺は似ているような……  
似てないような？ 自分を見ているみたいだったからな

「はあ〜」

「ん？ どうしたんですか兄貴？ 溜息なんて」

「いや……何でも」

屋上でくつろぎながらも似合わない溜息一つ  
お気づきでしょうか？ そうです、もうほとんどの人が漢字を使  
えるって事は、俺はもう小学生

卒園なんかあったという間で、もう小学生ライフですよ  
だけどまだ二年生か、と思い込んだ俺だったが、入学時にほと  
んどの奴らを舎弟にしました

1〜6年生までな。そういう悪は俺の舎弟だ

まあ、強い奴も数人は居たが俺には勝てなかったがな！！  
弱い！！

……俺ってマジで人間なのかな？

「兄貴、そろそろ授業も終わった所ですし、もう帰りましょう。放  
課後だし」

「あ？ そうだな、今日は俺一人で帰る。ランドセル持って来い」

「はい！！」

はは、もう小学校じゃねえよこんなの

精神年齢、すでに二十歳超えたよ。もう酒が飲めるワタバコ吸え  
るわだよ

「あゝ腰イタ」

もう歳だな〜って、まだ子供だぞ俺

帰り道の途中で呟いた言葉が結構恥ずかしい。家に向かって歩き、空は晴天。アスファルトからの熱を感じる

「暇だな〜」

と呟いたら、事件が起こるはずも無い……

『ドゴーン!!』

「おいお前ら!!　ここは俺達の秘密基地だぞ!!」

「うるせー!!　ここは俺達の縄張りだ!!　餓鬼はすっこんでいる!!」

「うわーん!!　折角……ぐす……つぐったのに」

「くっ!　成すすべ無し」

起こったよ……

俺の右方向にあるのは、空き地。そこで少年少女3人と、完全に不良の3人組みが居た

「たく、不良があんな事していいのかよ?　悪いことしているわけじゃねえしなあ」

めんどくせえ……俺はどこぞの主人公じゃええから帰る帰る  
見てみないフリをし、脚を進めた

「おい、謝れよ!! 俺達に!!」

「はん、こんなチンケなのを作ったのが悪い!! 正直ウゼんだ  
よ」

「何だとお!!?? 化石頭のくせに!!」

「なっ!? こ、こんの餓鬼!! 言わせておけば……!!」

「ちよ!? おい、これ以上言ったら何されるかわからねえぞ」

「うるさいぞ大和!! おい化石頭!!」

「ぶっ殺す!! 死ね!!」

3馬鹿の一人が、バンダナの少年に拳を振った  
少年少女3人組みは、目を閉じて次の瞬間を待った……。って、  
おいおい大人げねえな

『ガシッ』

「……!!?!?!?」

「おいおい、化石頭さん。何やっているんスか? 子供相手に大人  
げねエーツスよ?」

見過ごすわけにはいかねエなア



化石頭の拳が当たる前に、手で腕を止めた。そして、一斉に俺を見始める

「て、テメエもこいつ等の仲間か!？」

「え、違う「そうです。神川 獣代ツス」

「くっ!! 餓鬼が俺の拳を止めるなんて、マグレだ!？ ヤッチ  
まおうぜ!!!」

「「おおー!!」

3馬鹿共は俺を四方八方囲み、完全にヤル気を見せている  
他の3人はとりあえず近くで見ているが、女の子だけが目を瞑っ  
ている。俺が負けるとな

「おい少女!! 何目エ瞑ッてんだ!!」

「へ……」

恐怖があるからこそ、目を瞑り逃避する  
俺はそれが嫌いだ。嫌い過ぎるんだよ

「黙ッて見ている!! 俺が勝つ瞬間をなア」

「餓鬼の分際でー!!!! オラア!!」

『「下」』

「キヤアアアアアアア!!!!」

醜い音が響いた

化石頭は完全にヤツたと思ったのか？ 俺は聞いてねエぜ  
顔面に当たったが、俺は再度前を向いた

「!? 化け物か……！ いや、ただ浅かったただけだ！」

こいつの言う事はとりあえず無視  
少女……目を瞑ったな？

「いいか！！ テメエ等！！ 俺を見ている！！ 秘密基地の仇を  
取ッてやるからよ！！」『ドゴー！！！！』

「「「!??!?!?」「」

……もう許さねエ……  
言っている最中に、3馬鹿共は俺に攻撃してきた。腹、顔面、頭  
だが、今度はちゃんと見てくれたな。 餓鬼共

さア、一瞬で終わらせてやる

「うぜえ……………うぜえ……………うぜえ……………うぜえ……………うぜえ……………  
エエエエエ……………」

「「「どわ!?」「」

「『『ワイルド野生パンチ』！！』

「がへっ！！」





「おい！！ お前ってたしか、俺達と同学年の神川 獣代だよな？」

「あ？ そうだが……そうか、お前らが風間ファミリーっつーのか」

「おうよ！！ 俺は風間 翔一！！」

「アタシは岡本 一子。さっきは目を瞑ったりしてごめんなさい」

「俺は……まあ、直江 大和という。さすがは学校の番長。中々やるな」

これが、俺と風間ファミリーとの出会いだった

く03く 風の子、努力の子、知の子（後書き）

技紹介

『野生パンチ』

気等一切使わず、ただ腕の筋力を使う破壊的な技

『野生ジャンプ』

これも気等を使わず、脚と手の筋力で一気に高く飛ぶ

『野生パンチ・墜落ver』

名前の通り、『野生パンチ』を高く飛びながら、隕石の如く放つ技。辺りに被害があるため、全力でやった事が無い

く04く 孤独の自分はもう居ない

「フツッ!!」

『バキ!! バキ!! ドドドーン!!』

ふっ、今日はこれまでだな。朝早く起きて、まずはロードワーク。そして、山で木を使って特訓

こんな清々しい朝だしな、それに今日は休日!! 練習日和だぜ

額から出た汗を拭き、地面に座り込む

「ああ、疲れた。俺が世界最強だからって、修行しなくちゃ鈍るしな……それに、さらに上に行かなくては」

拳を空中で切り、今の調子を確かめる

しかし、アレから俺の学校生活は変わった……勧誘のという檻に迫られるわだ

アレとは、此間の救出……風間ファミリーと出会った日からだ

「まさかこの山奥まで来ねえだろ」

「居た……!!!! 獣代発見!!!!」

「何で此処に居るんだよ!? しかも勢揃い!!」

後ろには、風間ファミリーが何故か居た。全く、暇な奴らだ……  
って、思っている暇はねえ!!!! 逃げなくては!!!!





「待ちなさいよー！ー！！！」

「どんだけ粘るんだよ！？ いい加減、諦めてくれー！ー！？」

俺の考えが浅はかだった……もう体力の問題じゃねえだろ？ もう軽く5kぐらいは走ってるぞ

小道を使つてすぐバレ、木に登って過ごしてもバレ、とりあえず考えが読まれている

だが、着々と距離は離れている。このまま行けば……！！！！後ろを振り向きながらも、いまだに俺を追いかけている二人。一切疲れを見せず、むしろ笑っている

「何で俺を追いかけて来るんだよー！ー！！！？？」

「それは簡単！！ お前が欲しいからだ！！！！ それに面白い！！！！だから是が非でも仲間にならせてやる！！！！」

俺が……ほ、欲しいだと？ そんな考える奴、悟以来だな……スピードが気づかず緩み、いつの間にか止まっていた

「ついに仲間になる決心がついたのね！」

「……………な、なあ」

「ん？ 何だ」

振り向き、トーンを低めに話す。こいつ等が、何で俺を欲しいのかと……答えが知りたくなってた

「何で、そのう……俺が必要なんだ？ 強いからか？ たしかに、俺は世界最強だからって、他にも居るだろ？」

「うん、たしかにお前は強いぞ！！」

「ええー！！」

やっぱり強いからか……。俺の長所は『強い』しか昔から無かったその強さは前世でもあって、俺を倒せば名が上がると思った奴らがかかり多かった

それにより、ほぼ毎日が喧嘩だったため、『本当の友達』が居なかった

俺の『強さ』を盾にする奴らがほとんど……。悟以外、皆そうだった

この世界に來れば、俺の居場所が見つかると思ったが、やはり俺より『強さ』が目立ったため、その希望は消えた

「けど、此間の戦いは凄かったぞ！！まるでバトル漫画だった！！もう憧れだよ！！」

「うんうん！！正義の味方みたいで、カッコ良かったわ！！」

「！？！？俺が……憧れ？」

「ああ／ええー！！」

そ、そんなの初めて聞いたな。こいつ等なら、俺の居場所となっ  
てくれるだろうか……

は!?! いかんいかん!?! 何て事を考えてたんだ俺!?!!

「す、すまんが俺「うわあああああああ!?!?!」!?!? 叫  
び声!」

「あ、あの声って……大和だ!?!?!」

「コツチから聞こえたわ!?!」

少女が指指した場所へと、すぐさま向かい始めた。何で俺もって  
思ったが、それでも足を止めなかった

「く、熊……」

「ガルルルルルルル！！！」

「「大和！！??」」

大和という少年の目の前には、唾液をポタポタと垂らしている腹が減っている熊が居た

で、デカイ……こんな間近で見たのは、初めてだ

「じゅ、獣代……！！！」

少年は俺を呼んだ

だが、少年の声は弱弱しくなった。むしろ、何かを期待している目だった

が助けられると……それは、俺だ

俺を頼っている……

「獣代！！ 助けてくれ！！ 大和が危ないんだ！！」

「獣代！！」

「……………」

他の二人も、俺に助けを求める。そうか……俺はいつの間にか、

こんな居場所が出来たんだな

『強さ』には、こんな使い方があるなんて

「グワアアアアアアア！！！」

「う、うわあああああああ！！！！ 獣代ー！！！！」

熊の爪が、少年へと……いや、大和に向かって行った

「おい熊ア……何俺の仲間に手エ出してんだゴラア！！！！！！！！」

『バギ！！！！』

開いていた腹部に、思い切り拳を食い込みそのまま空へと吹っ飛ばした

熊と戦ったのって、初めてだ……拳が微妙に痛い

「今、仲間って」

「う、うん」

「じゅう……だい」

悟、俺にも居場所が出来たぞ。だから、俺はそこを守ってみせる

「今日から俺は風間ファミリーの一員だ！！ よろしくウ！！」

憧れ続かしてやるよ、本当の『強さ』を証明してやる

『強さ』は守るために……そして、自分のために。俺は、今此処で……

「卒業だ……」

今此処に、『強さ』という実感を味わった男が新たな仲間とともに進み続ける

く05く 力の子、友の子

「ふっふっふっ……!! 遂に……遂にこの時がくく来たアアアアアアアアアアアア!!!!!!!!!!」

拳を空に向け、今の気持ちをぶつける。あれからもまた一年……俺は風間ファミリーの一員となった日から

俺はある所の前で、いままで待っていた事が遂に叶ったんだ

俺がいままで楽しみで楽しみで、もう一ヶ月前からも不眠症だった……本当に辛かった  
だが、これで報われる

『ギ』

すると、門から誰か出てきた

細身の人手、まさにカンフーっぽい人だった

「君が、今日の挑戦者ネ？」

「は、はい!! 神川 獣代っス!! 今日川神 百代さんに勝負を挑みに来ました!!!!」

「そう力、じゃあそこで待っててネ」

ずっと待ってましたよ!!! さあ、早く早く早く!!!

一分一秒、早くあいつと戦いたい!!! 俺が最強だって示したい

「じゅ、獣代……!!!!!!!!!!」

「あん？　なんだワン子か。どうした？　応援に来てくれたのか？」

ワン子が急いで俺の所に来て、息を切らして何かを伝えようとしている。そういえば、キャップや大和は？

たく、折角休日に申し込んだのに……

「獣代！！！」

ぐはばと顔を上げ、何やら真剣な顔つきとなった

「キャップが……キャップが喧嘩しているの！！！！　あの島津って  
いう男子と！！！！」

「ああ、此間俺達に喧嘩吹っかけた奴か……って、何だってー  
ー！！！！！！　何で俺には言わなかったんだよ！？」

島津っていう奴は、俺は前から知っていた

とりあえず傲慢で、自分が最強だと思っているゴリラ馬鹿っつー  
らしいな

「そ、それは……」



「子side

「ワン子、絶対獣代にはこの事言つなよ」

「え………何で？」

学校の下校途中、キャップがそう言ってきたの

「わからないのか。獣代はこんどの休日に、あの川神院の人と試合するんだ」

「ええ………」

「だから、獣代には迷惑かけられねえ。大和、お前も言つなよ」

「ああ………獣代があんなに楽しみにしているんだ。最高のコンディションで、最高の試合して、勝ってほしいんだ」

「う、うん………わかった。絶対言わない!!」

獣代 side

「何だけど、けどやっぱり……」

ワン子は泣いている。自分は大和やキャップを裏切ったと。けど、とんでもない友達思いだな  
俺はワン子の頭に手をのせた

「ふえ…／／／」

「よく、俺に言ってくれたな。喧嘩なんて、まだお前らには早エぞ？ 大丈夫、俺が何とかしてやる」

「あ、ありがとう／／／ って、獣代も喧嘩しているじゃん」

「うっ……お、俺はいいんだ。さあてと」

別にこれが最後じゃないよな？ まだまだ、俺にも早かったっわけだな？

「よっしゃ！！ 行くぜワン子！！！！」

「!? ちょ／／!? 獣代!!」

ワン子を抱え、そのまま川神院を離れて行った。待っている!!  
餓鬼共!!

家の屋根等を使い、最短距離で決闘場へと向かった  
だいたいアソコだろ……

「待たせたネ……ってアレ? 獣代クン!! 獣代クン!!??」

翔一 side

「待たせたな、風間」

「よーし!!! 一対一の勝負だ!! 来い!!!」

空き地の真ん中で向かい合い、お互いには付き人が居る

絶対負けねえ!!!　そして獣代に言うんだ!!!　俺が勝ったって

「行くぜ————!!!」 『バリ!!!』　へ?　あああああああ  
ああああ!!!」

「岳人————!!!?」

ふっふっふ!!!　罠に掛かったな、馬鹿野郎!!!

大和が作った、この落とし穴に!!!

島津は何が起こったはまだ気づかず、俺は穴の中をしてみる

「!?!?　お、おい風間!!!　セコイぞ!!!」

「へへ、これも戦略の内だ!!!　行く「おい、何やってんだテメエ」  
ハハ、ナニヤツテンダヨヤマト」

「キャ、キヤップ」。ソレハセコイヨ」

後ろには迫力がある、野獣が俺達に話しかけていた

獣代 side

こいつ等、心配してきたのに……それは無いだろ。しかも古い!  
!　落とし穴って、逆に時間掛かるだろ

「キヤップ」。準備はいいかア」

「だ、駄目『ドン』あああああああ!!!」

キヤップの背中を押し、落とし穴へ墜落した

「テメエ等、お灸吸えてやる!!」

「いててて……」

「チツ!! テメエは神川か!! 何のようだ!! まさか、加勢でもするのか」

「あん? んな事しねエよ? たださア、最近ストレス溜まりまくッてエ、ちヨウどいい者見つけたんだよ」

「お、おい獣代!! まさか……!?!」

キャップは勘いいなア、その通りだよ  
手には小石や砂を持ち、見下ろしながら穴へと向ける

「おらアアアアアアア!! 食らえ!! 砂&小石攻撃イイイイイイ!!」

「イタ!? 痛い痛い痛い痛い!!??」

「うっお!? 小石居たい!! 砂目に入る!!」

「(地味な攻撃だ……!?!?)」

「ハーツハツハツハ!! どうだ? 俺の最強の地味技は!!」

愉快愉快愉快!! 何これ? 結構楽しいかも

「糞……!! おい風間、まずはあいつを倒すぞ!!」

「そ、それはいいけど……ッ……！ どうやってあそこまで……！  
！」

「俺様の肩を使え……！ そしたら………いいな」

「おう……！ 行くぜ」

何やってんだあいつ……。島津はキャップを肩車し、キャップはそこから這い上がってきた  
なっ……？ セケエ……！

「おし……！ 捕まれ島津……！」

「おう……！」

すると今度は島津が這い上がって来た  
はは、ほら何て青春な絵図でしょうか。これも俺のお陰………だよ  
ね？

「ふふふ、さつきは良くもやってくれたな………！！！！ 獣代！  
！」

「今度はコツチの番だぜ？ 元番町さん」

「は、はは……！！ 君達、もう仲が良いじゃないか！？ ほら、拳を  
引っ込めて友情を」「死ぬ………！！！！」「すみませんでしたア  
アアアアアア……！！！」

大和 side

「はは、お前中々やるじゃねえーか。気に入ったぜ！！ 俺様もお前らの中に入ってやる！！ モロ、お前もだ」

「そうか！！ じゃあ改めて、俺は風間 翔一！！ キャップはあだ名だ！！」

「僕は師岡 卓也。岳人のお守り役だよ」

「頼んでねえぞ！！ 俺様は島津 岳人だ！！ んで、他の二人は？」

島津は俺達に指を指した

二人って、もう一人居るんだけど……あそこで野タレ死んでいるし

「アタシは岡本 一子！！」

「俺は直江 大和。んで、アッチで死んでいるのが神川 獣代だ。」

って、ワン子……獣代を呼んだな？」

「うっ……」

「たく、まあ良いよ。こんな終わり方も、面白いしね」

本当に、不器用な奴だ……他にも解決方法あるのに  
あいつは、本当に面白い。次が読めないからな

「ありがとうな、ワン子」

「!?!? うん!?!?!」



く06く 進化への過程 『野生』の次は…

「あはははは、当ててごらん〜ワン子」

「止まりなさいよ〜、獣代〜」

言葉では何気にバカツプルみたいただが、現実はこうだった  
俺の脚はすでに明後日方向に逃げ、ワン子はそれでも追ってくる  
……しかも、怒りマークがついている

片手にはボールを持ち、笑顔で迫る  
周りは白いラインで囲み、中央には一本の線

「たかがドツチボールで怒るなよオオオオオオオ!?」

「アンタの球、顔面に当たって超痛かったのよー！ー！ー！！」  
覚悟しなさいー！ー！ー！！！！」

「仲良いよなあ〜、あいつ等」

「キャップ、現状を読んで言っているのかよ……」

「俺様なんか、獣代に何発食らったか……！！！！」

「あははは、もうガクトの顔が腫れてさらにブサメンになったね」

「一言多いぞー！！ モロー！！！！」

これが俺の毎日だった……こんな楽しいの、生まれて初めてかも

しれない

これもゼウスのお陰なのか？ いや、もとはといえばあいつのせいなんだよ！！

たく、無駄な人生過ごしたぜ

こいつ等は本当に笑える

どんだけ苦難になっても、死にたくなっても、それでも笑える。だから、本当に守りたくなかった

あいつ等がさらに進んでいるように、俺はもっとその先に進まなくてはならないな……

夕方

「おおし！！ 今日はこちらまでだ！！ 皆各自、家に帰って手洗いうがいしとくように！！ 以上！！」

「どこの隊長!？」

キャップがボケて、モロが突っ込む

日常だ……

「おいおいワン子、あの後獣代にまたやられたんだってな。なさけねえ」

「何よー！ー！！！！ ガクトだって、顔ボコボコにされてたくせに！ー！！」

「はいはい二人とも、落ち着いて」

ガクトとワン子が喧嘩し、それを毎回大和が仲裁  
日常……もう全てが、俺の日常と化している。いまでも笑えそうただけと言っんだ、当分はあえないが勇気を振り絞って

「じゃあ「ちよつと待て皆の集!ー!」ん?」

俺の一言で、皆は脚を止めた。さあて、此処から言っぞ

「すまんが、俺は当分お前らと会えない……かも」

「……………あっそ

「へ〜」

「で?」

「ふうん」

「それで?」

上からキャップ、大和、ワン子にガクトでモロ

.....

「それだけエエエエエエエエ!?!?!? え!?!? 普通『何で!?!?』  
何で居なくなるの!?!?』でしょ!?!?」

俺が空気読んでないみたいじゃねエエエエエエエエかアアアアア  
アアアアアア!?!?!?!

それを言つと、皆さんの顔はそれでも変わらず

「だって、どっせ三日ぐらいだろ? へっちやらへっちやら!?!」

「そうよねえ、別に獣代の事頼ってないし」

「逝って来い!?!」

「お土産よろしくな」

「僕、お饅頭とかでいいや」

俺は旅に出る、ト さんかいイイイイイイ!!???

つか大和? 何どさくさに逝つて来いなんだよ!?!? もういい!!!

俺は何処からか出したバツクを肩に掛け、後ろを向いた

「見てろよオオオオオオ!!! 今度会つたときの俺は『ワイルド野生』  
を超えているからなアアアアアア!!!??? 獣代、行つき  
まーす!!!」

こうして、俺は皆の前から消えた

ちよこつと後ろを振り向いたら、もう皆が居なくなったのは……  
余談である

「おい聞いたか! あの『餓王』が、あいつ等から当分会わないら  
し」

「そうか!! なら、これで俺達は有利になるぞ!! 今こそ、奴  
らの場所を奪つぞ!!」

さて、あれから一日は経った  
俺は何処に居るかというところ？

「おらアアアア！！ 上手投げエエエエエエ！！！」

「ガウウウウウ！！？？」

『ドーン！！……』

ただいま山で、熊と相撲をしております  
修行と言ったら山だろ！？ どんなSFじゃねえし、此処が一番

！！

前回、俺キャップ達に邪魔されたあの場所なのだ

「うっしヤアアアアアア！　　どんどん来いやアアアアアア！  
！　この山の番長になってやんぜエエエエエエ！！！！」

山の中で吠える俺。それにじょうじ、他の動物達も興奮し始める  
さあ超えてやるぜ、『ワイルド野生』を！！

んで二日目！！

「よ〜し！！　今度はテメエが相手か！？」

「パオオオオオ！！」

何でこの山に、象は居るんだよって突っ込んだ人！！　それはだ  
ね、ここは川神山というのだよ  
だから、何でも出てくる！！　理不尽だよなあ〜

「おうおう、テメエただの象じゃねえな？　そんな鼻を武器に使う  
なんざあ、初めて見たぜ」

そう、此処の動物達は異常に可笑的  
異常の戦闘能力に、学習能力がある。熊は異常な爪の硬さに鋭さ、

野犬は耳が痛くなるよう異常の遠吠え、鷹は異常なほどの動体視力  
に速さ

コイツの場合、鼻が鞭のようだ

だが勝つんだ。俺は負けられねえんだよオオオオオオオオオオ!!!

### 三日目

「ふふふ、遂に我が故郷……川神市だ!!!」

本当に三日で帰って来れたな……いや、俺も驚き驚き  
しかし、誰も迎えに来てくれない。しかも、いつも皆で遊んで居  
る所にも居ない

「たく……折角強くなったのによォ」

地面に腰を落とし、溜息をつく。ああ、空が真っ青だぜ  
と、だんだん頭は後ろの方へと落ちていった

「はあ」

そこで目を開けた

だが、とんでもないのが映っていた。とても形相の顔の男の子が



「いい！？ 屋上から落ちてやがるウウウウウ！！！？ 助けな  
きゃー！！」 『ワイルド野生ジャンプ』！！」

いつも通り俺は一気に、その男の間を詰めていった  
たく……ただ自殺では無いな。じゃあ、突き落とされたのか？  
人を殺そうとしている奴ア、俺が許さねエ

大和 side

俺の目の前でありえないのが起こった  
獣代が消えて直後に俺達の居場所が無くなったので、川神院のお  
孫さんに助っ人として頼んだのだ

条件としては俺が舎弟となる事

姉さんが居れば、丸く収まる……と、思った俺は馬鹿だった。早  
速上級生達を倒した姉さんなのだが、一人が姉さんを怒らせた

そして、解決法は全然獣代と違った。獣代はもつと上手く収めて  
くれる……けど、姉さんはビルから突き落としてしまった

「大丈夫だ、この下は柔らかいマットがあつたはずだ」

凄い笑顔だった

そして姉さんはビルの下を覗き込んだ。彼は無事なのだろうか……

「おいおい、んでえこの状況？ まさか、テメエがやったのか？」

「！！！？ おいおい、壁を歩いている奴なんか初めてみたぞ？」

「獣代！！！？？」

獣代とワン子は叫び、ビルの下から獣代が突然出てきた  
担いでいるのは、先ほど落とした上級生

「久しぶりだなアアア……川神イ」

「……ああ、数年ぶりだなあ。神川ア」

上級生を近くに投げ、獣代は姉さんに近づく。姉さんも気迫に負けず、獣代に近づいていく

なんだ……あの二人の後ろに、何かが居る

俺にもわかる。そう……似ているんだ。二人とも  
似たり寄ったりじゃなく、『同じ』

「とりあえず、こんな事してテメエ……痛くないのか？ 後悔して  
ねエのか？」

「は？ そいつが私を怒らせたのが悪い」

「だからッて血に飢えているくせに、此処までするとはなア。正直ヤリスギだ」

「そつかア？ なら、潤してくれよ！……！」

姉さんは自分の気を打つ側へと放った

どうするんだよ…… 獣代

「俺も飢えている『野生』………じゃなくて」  
ワイルド

躊躇いも無く、姉さんは詰めていく



く06く 進化への過程 『野生』の次は…(後書き)

感想をください!!



『ドーーーーーン!!!!!!!!!!』

決まった

川神は必死に防いだろうが、俺の『野生パンチ』には勝てなかつたな

そのまま地に足が着かず、吹っ飛んでいく

「ほお、それほどの腕力があるのか……。さすがは、私が興味持った奴だ」

だが、奴は俺よりも『野生』ワイルドだった。足を着かせ、異様に笑うさすがに俺でも驚いたな……。いや、甘く見てたいいぜ、ここからは真剣な勝負と行こうぜ!!!!

ファイティングポーズを取り、川神をおびき出す

川神Side

今私の目の前には、とても恐ろしい男が立っている  
たしかに余裕……すぐ勝てる決闘。だが、こいつから漂匂い……  
なんだ!?!?! 何が起こるんだ!!

正直、私はこいつを侮っていた  
ただ力しかない自慢男だと。だが、実際違った。こいつは「力」  
を主張するような、奴ではない  
私の闘争本能が告げている。何か隠していると

いや……奴が私なら、何かを隠している。似ているんだよ。そっ  
くりそのままに

「行くぜエ、川神イイイイイ!!」

「来い!! 神川アアアアア!!」

だが、今の私にはこの戦いを楽しまなくては!!

神川side

ガチで強エ……んだよ、んだよ、んだよ!!  
すツげエ……

「楽しいぞコノヤロオオオオオオオ!!!!!!!!!!」



『ドーーーーー！』

まるで上手いのを食べて箸が止まらないほど、俺は拳を止められない。否、止めない

拳だけの戦い。脚はこの乱撃を耐えるために、地面を踏ん張って立っている

痛い何て感じねエ……とことん戦うんだアアアア！！

「行くぜ！！ ちゃんと耐えろよオオオオオオオオ！！！」

両腕を曲げ、後ろへと思い切り引く

新必殺……

「ふん！！ さっきのを二つ放つのか。お見通しだぞ！！」

川神は正面をガードし、完全防御態勢へと入った。よほど、さっきのが効いたのか

だが、コイツはどうか？

「！？ いや待って！！ あれは見たことない！！」 『野生パンチ』

は、あんなに腕を引かない！！！」

「なに！？」

大和めエ……助言入れやがって。だが、もう遅い

体全体を前へと動かし、腕は下からではなく『上』からだんだん降りていく

「『野生の牙』」

『ビュン！』

「ぐはっ！？」

まるで猛獣の牙のよう描き、上からのフック  
これを食らッても生きているようなら、そろそろあれを使っしかないな

川神は両腕にダメージを食らって、上がらなくなっている

「くっ！！ まさか攻撃を食らうとは……だが」

何！？

気づくと、まるで何もなかったような体になっていた

んだよコイツ……まさか、活性能力がこんなにあるなんて！？

やばい……

「私も気に入ってたなア。『瞬間回復』っていうんだ。骨折しても、毒をになっても、全部回復する。さア、死合い再開だアア」

またも異様な笑いで、俺に近づく

今度はゆっくりと、だんだん俺に恐怖を刻み込もうと

正直、俺の負け

うん、勝てねえ。どこに必勝法があるんですかって話だ。セコイぞ、お前！！

って、今でも言いそうだけ。けどなア……

「獣代！！」

あそこでバカみたいに応援している奴らが居るんだよ。川神じゃ

なくて、俺に  
だから

「これでお終いだアアア!!! 『川神流・致死堂』!!!」

無数の気弾が、俺めがけて飛んでくる

ああ、終わりだ。諦めよう。二度と最強なんて言いません。カッ  
コよいことも言いません

「何て言つかよオオオオオオ!!!!!!」

『ドオオオオオオン!!!』

「ふん、終わったな」

「まだだ!! 何勝手に終わらせてんだ!!」

「『ビースト エレファント野獣・象と蛇の乱撃』!!」

「『ええええええええええええええええ!!?!?』」

「何IIIIIIIIII!!? 腕が伸びているだとオオオオオ!!?」

俺の片手を器用に使い、気弾を全て防御した  
左腕は正常だが、右腕は異常に伸びている

「まさに象の鼻のように固く、蛇のように曲げる。新たな進化だ」

「あ、あいつ……」

ふふふ、驚いているようだな。あんなに苦しい修行をしたんだ。  
どうだ、凄いだろ!?

「本当に人間か!？」

「人間じゃボケエ!! 張り倒すぞ!!」

「『い、いや、もう獣だよ……』」

「くそオ!! なら、これで終わりだアアアア!!」 『川神流・  
無双正拳突き』!!」

奴の右腕に気を全体集め、俺に向かって走ってくる  
なら俺も！！

俺も右腕に全体の筋肉を強め、左手で拳を抑える

「そのセリフは、二度目だけ！！」  
『ビースト野獣パンチ』」

そしてお互い。力を振り絞って拳を放った

『ドッゴーーーーン！！！！』



「「真似するなアアアア！！！」」

「本当に似ているな、あの二人」

川神イ！！ 絶対俺の舎弟にしてやる！！！！

く07く 武の子vs野生児 結末は…（後書き）

技紹介

『野生の牙』  
ワイルド ファング

両腕を使って、猛獣の牙を描くように拳を打つ

『野獣・象と蛇の乱撃』  
ビースト エレファント&スネーククラッシュ

野獣という新たな流派を作り、象の鼻のような固さと、蛇のような曲げる腕が出来る

『野獣パンチ』  
ビースト

『野生パンチ』  
ワイルド の進化版。さらに腕を引き、左手で拳を抑えるほど威力が高い



く08く 野獣に捧げた代償

大和side

あの死闘から、早くも二日は経った  
姉さんは鉄心さんに謹慎処分を受けて、今日からまた学校に通う  
ことに

だが……それよりも

「何で獣代が居ないんだ」

「ええ、可らしいわ」

「俺様が何故モテない程可笑しいぜ」

「ガクトが元からでしょ！ けど、あんな元気な塊が来ないなんて」

そう、あれから獣代は顔すら見せていない

まさか、何かあったのか！？

その言葉が頭全体駆け巡り、不安しかなかった

「うーっす」

「「「「「!!??」」」」」

だが、そんな不安はさらに急激に……

獣代side

はあく、久しぶりの学校だな  
なんか、こう入りづらいな……言われねーかな？ どうした！？  
的な

つか心配されてほしい

まあ、無理だがな……期待しないでおこつ  
ドアを開け、とりあえず中に入った

「うーっす」

「……！！!?」「……」

中央の席は俺の席で、その周りに風間達が囲んでいる  
そして、俺を凝視し始める

「久しぶりっ！！ 元気だったか」

「じゅ、獣代!?!」

んだよ、急に大声でどうした？ トイレか  
大か小か？ 出すもんは出さなくてはな

「どうしたのよその腕!?!」

「あん？ ああく、いや此間の試合で右腕全体イカレちゃったんだ  
よ。ははは、なぐに。あと一週間で治るだろう」

「一週間って……腕を怪我するなんて、あの試合で見れなかったけ  
ど」



だよ

つか、もう右死んだ……ほら見て

「きゃああああ！？ じい、獣代の腕が……！？」

「うおおお！？ 何だそれ！？ 骨が折れて右腕の形変わってるぞ  
！？」

「これ絶対トラウマになるよ……！」

ああ、右よ……いままで良く頑張った

「全く、なんつー複雑な骨折なんじゃ」

「一週間経てば治るはずだったんだよ!!! なのに、あんたのお孫さんが……」

「いいじゃないか姉弟!! 私たちの仲じゃないか!!」

あれから学校は終わり、今は川神院の道場に居る

俺を手当てしているのは、川神の総領。川神 鉄心。その字を書  
いて、最強とも読む

鉄心さんの気で、俺の右腕はだんだん回復している

「しかし、お主……自分の体を何だと思っているのじゃ」

「!?!? ば、バレてたか……」

無茶はやったなとは思うよ？ けど、あの試合だけは勝ちたかったし

最終手段なのよ!!

鉄心さんは右腕を手で触りまくり、目が真剣になっている

「こんな無茶に『気』を使うから……」

「ん？ おい待て爺。姉弟には気なんて、一切も感じないぞ？ 使っつて……」

此間まで、俺はそう思ったがな

見つけちゃったんだよ……あの、山の修行でな

「気を読み取るのは『闘気』じゃ。まさにデカければデカいほど、相手は恐れるじゃろ。まさに『闘わずにして気で勝つ』。だが、こやつの場合……」

「使い方がわからんじゃったろ」

「へ？」

うんうん、俺も気づいたのはまず『殺気』だったからな。動物達  
ので学んだんだ

辛かった……強すぎて

「だが、コヤツには内なる気はまさにモモ以上。気を『撃つ』ので  
はなく『打つ』のがコヤツの基本じゃったな」

「じゃあ……私が此間食らったあのパンチは……」

「それはたぶん、コヤツの『筋肉』じゃろ。気じゃなく、筋肉10  
0%で」

「ば、化け物か……!？」

うん、そう言われると少々凹むな

自分の体質って全然わかんねえからな、そんなに詳しくないし

「そこで俺は考えた。この気を有効活用しよう」と

「けど、使い方はわかってても使えないんだろ？」

「ちつつちつ。俺はこの悲劇的な体を恨んだ。だが……ある事に  
気づいた。それは……『人体改造』」

たしかに改造とは、何かのハイテクノロジーで作るのだが、俺の  
場合は違う

気で自分の体を作るんだ。人間ではなく、『野獣<sup>ビースト</sup>』で

「兄妹の気弾を弾いた技わったろ？」

「ああ。象と蛇の技か」

「『ビースト エレファンタークラッシュ野獣・象と蛇の乱撃』。俺の右腕に気を送り、硬さや長さを変えさせてもらった」

「何でもありじゃのう……」

全動物の特性を使つての攻撃

まだまだあるからな……けど、一杯作つたのはいいんだ

欠点があるんだよなあ。何で気づかなかつたんだろ。アン時の俺バカ！！

「無理に体を変えたから、その後に体が追いつかず悲鳴を上げる。代償みたいなもんだ。だから、一日に……三日に一回だけだ」

「だから此間二回使つたから、かなりの重傷に」

成長はしているが、全然追いついていないって事だ

右腕はもう治り、上着を着る。そろそろ帰るか

「俺はもう帰る。じゃあな……」

「気を付けるんじゃないぞ」

「じゃあな」

足を進ませ、道場から出ようとする



って、此処まで言ったんだ。この一言言って帰ろうか

「おい兄妹」

「ん？」

「まだまだ未完成の技だが、何れは完成する。だから……今度試合したら、テメエは俺の舎弟だ。覚悟しとけ」

「……ああ！！ 逆にコテンパンにしてやる！！」

「（モモめ……いい顔しておって。良い宿敵持ったのう）」

俺はお前の他に負けるなんてしねえ。勿論、お前にもな

く08く 野獣に捧げた代償（後書き）

感想をください

く09く 悩みを持っている少年二人

「俺は〜風になる〜。そして〜、とりあえず〜……パン買ってくる  
わ〜」

さすが天才な俺だ。こんな素晴らしい歌が出来るなんて

しかし、今日は学校休みっつーのに、皆付き合いわり〜な〜

大和は勉強、キャップはプチ旅行、ワン子はおばあちゃんの買い物付き合い。ガクトは家の掃除、モロは今日一日どこかに出かける

……

んで、最後は大丈夫だろうと思った兄妹だが……よりによって、

学校で溜めた宿題の後片付け

ああ〜、暇だ暇だ

「暇だああああああああ！！！！！！！！！！！！！！」

「うわっ!?!」

「な、なんだよ急に!?!」

すると、横にある河原に二人の少年が居た

さすがに叫ぶ事はなかったな

頭を手でかき、謝ることに

「すまん。いや、あまりにも暇すぎるから……お!?!　そっだ」

「な、なんですか」

「あん？」

これも何かの縁つつーわけですな  
暇な俺に、神様からのプレゼントだな！！  
ふっふっふっ、有効  
に使わせてもらっぜ  
二人の手を取った

「俺は神川 獣代だ！！」

「へ？ 僕は、葵 冬馬」

「俺は井上 準だ。で、なんだテメエ。若に何かしたら、許さないぞ」

「いやいや、どうだ？ 上の空なんてつまらねえだろ？ 餓鬼は遊ばなくてはな！！ 行くぜ！！」

脚に力を入れ、川へと突撃した

「「うわあああああ！！！！」」

「さあ、入水！！」

そしてその言葉を言った途端高く飛び、川の中へと入った

『ザブーン！！』

うっん、最近熱くなってきたからな。涼しいや  
沈んでいた二人は起き上がり、かなりの形相で  
……ああ、俺悪いことしたかな？ たしかに、急に入るには悪

いと思うが

「何するんですかああああああ!!!」

「死ねええええええええ!!!」

そ、そんな怒るなつてば!!

二人は俺の肩を掴み、さらに詰め寄る

「……怒っちゃいやん」

『ブツチン!!』

「沈める!!!」

ああ、最近の若者は何てキレやすいんだ？ 江戸っ子ですか!?

冬馬 side

父の違法なやり取りを知った僕

僕の家は病院です。一応、川崎市では一、二を争うほどの病院  
僕はそれを誇りに思っていました

『父は街での医者なんだ』

『父は凄く上手いんだ！！ 今度診に来れば』

『父は  
』

だが、それは此間までだった

僕は知ってしまった。父は違法な事をしているんだって。手術の失敗、胃や肝臓の無断で取ったり、それら全ては金で解決している

汚い……なんて汚らわしいんだ！！ けど、僕には勇気が無い

僕の友達の準まで巻き込んで、どうすればいいか……  
どうしたら、僕は救われるのか

早く……この冷たい空間から出たい。目を背けたい！！

だけど、僕の目の前に……何でもしてくれる、まさに『自由人』  
いや……『野生児』が来るまで

彼は急だった。急に遊ぶといいだし、急に川に入り、急に遊びだした

「はっーはっはっはっー！！ 食らえ！！ 波のプール！！」

「此処プールじゃねえし！？ つか、テメエ上下に動いているけど、全然なつてねーし！！??？」

「え！？ マジで！？」

何でだろう、さっきまで怒っていたはずなのに急に気持ちが楽になった

「若！！ 此処にバカがいます！！ ぜひ手術を！！」

「はい、これは危険な手術になるでしょう」

「元からだ！！ つか酷いなおい！？ 僕ら、さつき知り合った仲でしょ！？」

「何故かバカにしたいくなりますノなる」

そして、腹の底から何故か笑が込みあがってくる  
横に居る準は、もうすでに笑っています  
表情ではないですが……そうですね、『いつも』の準になっています

「くくぷつ……あははははははは！！！！」

本当、何なんですかこの人！！ 面白いです！！ 楽しいです！！  
たぶん、今日という日を絶対忘れないでしょう

時刻はもう夕方

私たちは川からあがり、草原の上で転がっています

ああ、なんて今日は夕日が綺麗なんだろ？ いつも見ていますのに

「なあ、若」

「なんです?」

すると、準が小さな声で聞いてきた

「こいつ……何処からか、何故か笑えるよな」

「ええ……私とは逆です。けど……」

「ああ……」

空を見上げ、こう言いたくなった

「「言い人ノ奴ですノだ」」

この人なら、僕を助けてくれる

たった一日遊んだだけですが、何故か確信がきます

「ねえ、神川くん」

「獣代でいい。俺も冬馬って呼ぶから。あとテメエハゲって呼ぶから」

「俺ハゲてねえー!? まだピツチピチだ!」

「あ、ごめん。なんか未来が見えたから……」

こんな状況でも、この人は……

僕は正面を向き、重要な質問をしだす



「僕……悩んでいる事あるんですけど。聞いてくれますか」

「……いいぜ。俺になら何でも言え」

「じゃあ

」

## 獣代 side

冬馬からの悩みはとも申告だった

これは子供の悩むでもなく、大人の悩みだった。裏を知ってしまったんだな

「これが、僕の悩みです」

「そうかそうか……じゃあテメエ、そのまま言わなくていいのか？」

「いえ……けど」

周りが気になるのか

そうだよなあ、こいつん家の病院って凄く人気らしいしな、  
マスコミとか凄いが、何を言われるか

友達はたぶん何か言ってくるだろ。大人たちは可哀そうな目で見たり、ましてや逆

「俺はあ、弱虫が大っ嫌いだ。ああ、嫌いだ。反吐が出るね」

「!!!??」

「お、おい!!」だが……弱虫は強い奴を頼る。俺は強いぜ？ 最強だからな……」

「そ、それって……」

「お前……」

俺はな、弱い奴を守るのが好きなんだ

つか、とんだお人よしだ……昔の俺なら、どう答えるかな  
さあて、後で鉄心さんに伝えるか

「これも何かの縁……まあ、死んでもって言ったら元も子もないけ

ど……死んでも守ってやる。テメエの根性、見せてやれ」

「は、はい……！」

「くっ……泣かせるぜ……！」

さあて、俺は何か学校とかそういうの知らないが、まああの人なら何とかなるだろ

「ねえねえ知っている！？ こないだ、あの有名な病院が違法な事したらしいわよ……！」

「僕知っている。たしか今日の朝、記者会見してたよ」

「俺は知らないぞ……！」

学校の教室で、風間達は話し出す

その話が……いいね。盛り上がっている上がっている

「みんな席につけ!!」

「やっべえ、もうこんな時間か。俺様達はもう帰るぜ。行くぜモロ」

「じゃあね」

ガクトとモロはもとの教室に帰り、俺たちは席に着いた  
先生は教壇の目の前で立ち止まった

「それでは、今日このクラスに来た転校生が居る!! 仲良くする  
ように。じゃあ、自己紹介を」

「初めまして、葵 冬馬です」

「俺は井上 準だ。よろしくな」

来たな……冬馬、ハゲ  
鉄心さんに頼み、二人をこの小学校に入学させた  
俺って頭良いよな

「お、おい!! あいつつて、あの病院息子「テメエ、その事をそ  
れ以上言ってみろ? 咬むぞ」ひいひいひい!!」

「ふふ、頼もしいです」

「全く、スゲエ奴だ」

さあて、とりあえずまたここ等の連中でもシメヨウカナ? 高校

も入れて

く09く 悩みを持っている少年二人 (後書き)

感想をください!!

そして今回から次回予告です

「テメエ!! 汚いんだよ!!」

「うう……た、助けて」

「この「じゃじゃじゃじゃん!!」「!?!」

「虐めカッコ悪いよ。」

「」「」……「」「」

「誰……」

「俺」

く10く 恋の子の春

それと皆様からのアイデアで、技を考えてほしいんですけど……

『ワールド 野生くく』 『ビースト 野獣くく』

絶対その次にあるのを当てはめて、どいう技なのか説明してください

皆様からの技アイデア、お待ちしております

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9918y/>

---

そこは真剣な世界だった

2011年12月11日12時50分発行